

新しい「ミサの賛歌（ミサ曲）」について

2022年11月27日（待降節第一主日）から、新しい「ミサの式次第と奉献文」が実施されるにあたり、口語文のミサの賛歌（ミサ曲）が3種類準備されました。

A（605～609番）は、グレゴリオ聖歌のミサ通常式文集「キリアーレ（Kyriele）」から旋律を選び、その旋律をいかしながら日本語の式文を歌えるように手を加えました。単にグレゴリオ聖歌の旋律に日本語を当てはめるのではなく、日本語の抑揚やリズムを考慮しつつ、原曲の旋律を可能なかぎり残しました。

B（610～614番）とC（615～619番）は、既存の旋律によるものではありません。Aのような教会旋法ではなく、長短調の音階に基づいています。Bの「栄光の賛歌」は、従来の「栄光の賛歌」のように全体を通して作曲された通作歌曲ではなく、式文を4節に分けて、それぞれを同じ旋律で歌う有節歌曲として作られました。

Aは、単旋律様式の自由リズムによる作品なので、符尾や符鉤や^{ふこう}連桁^{れんこう}を用いない符頭のみの音符で記譜されています。符頭のみの音符は楽譜上の音高を示しますが、厳密な八分音符や四分音符などの音価（音の長さ）を定めたものではありません。同様に、白抜き^{びやく}の全音符や二分音符も、四分音符の4倍や2倍の音価を示すものではありません。答唱詩編の詩編を歌うときのように、示された音高上で朗唱するように歌います。符頭のみの黒い音符は原則として等しい音価を持ちますが、旋律線の大きなまとまりの終結部である小節線の直前では旋律の流れに沿って自然に速度が緩やかになります。符頭のみの黒い音符に符点のついた音符とテヌート記号をつけた音符は、符頭のみの黒い音符よりも長い音価を持つことを示していますが、厳密に1.5倍や2倍の音価を示すものではありません。

曲中に用いられている複縦線は、息継ぎを十分にとる箇所です。段落の句切れを示しています。通常の小節線は、式文の句点の箇所を示し、この箇所でも息継ぎを十分にとることができます。五線のいちばん上の第5線のみにかかる短い区分線は、式文の読点の箇所を示し、息継ぎは短めにとります。

「いつくしみの賛歌（キリエ）」は、聖歌隊もしくは先唱者と会衆とによって応唱形式で歌われます（「ローマ・ミサ典礼書の総則」51参照）。

「栄光の賛歌（グロリア）」は、司祭あるいは適当であれば先唱者か聖歌隊が歌い始めます（同53参照）。

「感謝の賛歌（サンクトゥス）」は、全会衆が司祭とともに歌います（同79b参照）。先唱者か聖歌隊が歌い始めることも、一同で歌い始めることもできます。

「平和の賛歌（アニュス・デイ）」は、通常は聖歌隊か先唱者が歌い始め、会衆が応唱しますが（同83参照）、一同で歌うこともできます。

各賛歌には、現行の『典礼聖歌』に準じて番号が振られています。500番台は『別冊 毎日のミサ 楽譜 アレルヤ唱・詠唱』で使用されているので、新しい「ミサの式次第と奉献文」は600番台を使用します（601～603番は「ミサの式次第」で使用します）。